

Studia Classica 2 (2011)

使徒ヨハネ伝承に見る殉教者概念の変遷

大谷 哲

使徒ヨハネ伝承に見る殉教者概念の変遷

大谷 哲

1. 序

西欧キリスト教世界では古くから古代の教父証言に基づき、使徒ヨハネは自然死したと信じられ、19世紀前半までは定説となっていた。しかし同世紀後半から、一部の神学者たちはヨハネが殉教したとする有力な諸伝承を次々と指摘し、自然死伝承を否定しようと試みている。とはいえ、旧来のヨハネ自然死伝承は、数多くの重要な教父たちの証言に基づくゆえに、その価値を完全に覆されたわけではない。現在、使徒ヨハネの殉教に関わる二つの相矛盾する伝承についての議論は膠着し、決着不可能かの如き様相を呈している。しかしながら管見では、この論争は次のような解釈を採ることで解決できるように思われる。

紀元後250年頃を境として、それ以前の用語法では「殉教者」という用語は必ずしも信仰のために死んだ者だけを指したわけではなく、信仰ゆえにローマ帝国当局によって有罪判決を受けた者すべてを、すなわち判決後に何らかの理由で釈放され教会に無事帰還できた者をも含んだため、使徒ヨハネは信仰ゆえに有罪判決（追放刑）を受けた限りで「殉教者」と称され、他方でドミティアヌスの死後釈放されて「トラヤヌスの時代まで生き」、天寿を全うしたという二つの伝承が成立したと推測される。そのため、使徒ヨハネの「殉教」伝承を伝える諸史料と、彼の自然死伝承を伝える諸史料とは本来、何ら矛盾せず両立可能なものであったのである。19世紀以降の研究者たちは3世紀中頃以前とそれ以降の用語変化を考慮せず、それぞれヨハネの「殉教」を伝える諸伝承と自然死を伝える諸伝承とは互いに排他的だと考え、どちらか片方に依拠して議論したため、論争は混乱を続けたのである。

本稿は該当史料を挙げながら、ヨハネ伝承に関する従来の解釈の問題点をこの点を指摘し修正をはかることを目的とする。ヨハネの殉教に関する古伝承を

整理検討することは、上述した「殉教」にまつわる用語法変遷を辿る一つのモデルケースを提供し、殉教神学の発展過程および用語法変遷の背後にある帝国と教会の“外交”関係の変化を解明することにも寄与するものである。

本稿の課題は古代キリスト教世界に成立した使徒ヨハネ伝承の用語解釈(釈義)に限定され、諸伝承の融合過程や伝承それ自体の真質性の検討を通じた史的ヨハネ像の再構成は本稿の枠を越える。2世紀以降のヨハネ伝承では、福音書が伝えるゼベダイの子でヤコブの兄弟ヨハネはパトモス島に滞在し現地で宣教活動した「私、ヨハネ」(黙1.9)と同一と見なされてはいるが、果たして両者は実際に同一なのか否か、このような問題を取り扱うことは史的ヨハネ研究に不可欠であるにもかかわらず、これは史料上の制約から非常に難解な問題であるゆえ、この点に関する議論は別の機会に委ね、本稿では通説に従い議論を進めたい。

2. 先行研究の整理

2世紀末、リヨン司教エイレナイオスはその著作『異端論駁』の中でこう書いている。「これらアジアにおいて主の弟子ヨハネとともに精通していた者たちは、彼らにヨハネがこうした情報(キリストの時代に関して)を伝えたのだと賛同する。そして彼は彼らの間にトラヤヌスの時代まで留まった」¹、「ともあれ、エフェソスにある教会、これはパウロによって創立され、またヨハネがトラヤヌスの時代までそのもとに留まった教会であるから、これも使徒たちの伝承の真の証人である」²。トラヤヌス帝は98年から117年までローマ皇帝の地位にあった。ここから、使徒ヨハネはエフェソス(あるいは少なくともアジア)に98年までは留まっていたことになる。後に第3章で見ることになる多くの教父証言がこの「ヨハネ自然死伝承」を支持し、「自然死伝承」は中世における一部の伝説を除けば、19世紀に至るまで議論されることなくキリスト教社会で受け入れられてきた。

しかし19世紀後半に入り、これに対し疑問が提示され始めた。1866年、W. Wrightが『シリア殉教者暦』と呼ばれる、殉教者の記念日を記したカレンダー

¹ Iren *AdvHaer* 2.22.3.

² Iren *AdvHaer* 3.3.4.

一をシリア語から英訳したとき³、その中の一節に「ヨハネとヤコブ、使徒たち、エルサレムで」という文言が存在することが判明した。だがこのことに注目した学者は少なく、あるいはこれに気付いた H. Ewald もヨハネが自然死したことを疑いはしなかったので⁴、この史料は『殉教者暦』という題名がついてはいても、必ずしも受難死した者に限らない「キリスト教の英雄たち」を記念する日付を示していたものと考え⁵、彼がこの史料においてなした発見は、1899年に F. P. Badham が Ewald を批判対象として取り上げるまで忘却されていた⁶。

1888年、C. de Boor は後述するフリュギア司教パピアスの断片史料がヨハネ殉教を示していると指摘したが⁷、これは Th. Zahn によって取り上げられた1899年まで⁸、批判も賛同もされず無視されていたのである。

1903年、J. Wellhausen が新約聖書を根拠に疑義を提出した。彼は『マルコ福音書』に関する注釈書を書いた際に、10章39節の「*τὸ ποτήριον ὃ ἐγὼ πίνω πίεσθε καὶ τὸ βάπτισμα ὃ ἐγὼ μαπτίζομαι βαπτισθήσεσθε*, (私が飲む杯をあなたたちも飲み、私がこうむる洗礼をあなたたちもこうむることになるだろう)」という一節に注目した。Wellhausen はこの箇所を、ヤコブだけでなくヨハネもが殉教死することを予言するテキストであると考え、このテキスト成立時には予言はゼベダイの二人の息子において成就していたと推論したのである⁹。

この Wellhausen の見解を取り上げ、さらに発展させたのが E. Schwartz であった。翌1904年、彼は先述したパピアスの断片をこの議論における重要な史料として引き合いに出した¹⁰。シデのフィリポスとゲオルギオス・ハマルトロスの引用において伝存するパピアスの断片には、「神学者ヨハネと彼の兄ヤコブはユダヤ人によって死に付された」という文言があった。この文言が、使徒ヨハネの殉教を裏づけると見なされたのである。1907年に、505年に成立した『カルタゴ殉教者暦』においてさらなる証言を発見したのが F. C. Burkitt であった。この暦の12月27日には、「洗礼者ヨハネとヤコブの記念日、彼を

³ W. Wright (1866), 45 sqq.

⁴ H. Ewald (1866) (=J. F. Smith trans. [1886], 170)

⁵ H. Ewald (1868) (=J. F. Smith trans. [1885], 163, n. 1.)

⁶ F. P. Badham (1899), 729-740. Badham は以下に挙げる「使徒ヨハネ殉教説」が根拠としている諸史料を既に指摘している。cf. F. P. Badham (1904), 539-554.

⁷ C. de Boor (1888), 165-84.

⁸ Th. Zahn (1899) [未入手].

⁹ J. Wellhausen (1903), 90.

¹⁰ E. Schwartz (1904) (= [1963], 48-123)

ヘロデが殺した」と記されていたのである。この殉教者暦において、誤って洗礼者ヨハネと記された箇所には、本来、福音記者ヨハネの名が記されるべきであることは、前述した 411 年に編集された『シリア殉教者暦』の 12 月 27 日に「ヨハネとヤコブ、使徒、エルサレムで」と書かれていることから推測された¹¹。

1908 年には、上記のヨハネが殉教死したとする説に対して、J. H. Bernard が反論を行った¹²。Bernard は以下の 3 点を指摘しながらこれに反論を加えている。まず、1. エイレナイオスは使徒ヨハネの孫弟子であるゆえ、その証言を簡単には否定できないということ。2. 『パピウス断片』に関しては、パピウスは（ヨハネの兄）ヤコブが「ユダヤ人」によって死に付されたと書いたけれども、使徒行伝 12. 2 ではヤコブは 43/44 年にヘロデ王によって殺されており、むしろ主の兄弟ヤコブがユダヤ人によって石打にされていることから、パピウスが書いたのはユダヤ人による主の兄弟ヤコブの殺害のことであったと考えるべきであること。そして、3. 『シリア殉教者暦』については、その価値を慎重に検討せねばならないこと。何故ならば、ニュッサのグレゴリオスもヤコブとヨハネが同じ日に記念されていることを知っていたが、二人の使徒の殉教に関しては、注意深く区別しているからである。Bernard の結論は、使徒ヨハネは単に、後に「告白者」として信仰のため実際に殺された者から区別された者を含む古い用語法での「殉教者」として呼称されたのだ、というものであった。これを受けて、翌年、Feltoe は『ローマ典礼暦』以外のいくつかの教会暦においてヨハネとヤコブの殉教が証言されていることを伝承史的観点から指摘したが、その「殉教」が具体的に何を意味するか、そして使徒ヨハネの殉教問題については結論を避けている¹³。

続いて 1910 年に、マルコ 10. 39 はゼベダイの息子たちの殉教死を特別に指

¹¹ F. C. Burkitt (1907²), 252-256.

¹² J. H. Bernard (1908), 51-66. この論文のオリジナルは入手できなかったため、Bernard (1928), xxxvii-xlv. を用いた。Bernard の結論は xliiii.

¹³ C. L. Feltoe (1909), 589. ちなみに、Feltoe によれば当時 Westminster の dean であった J. A. Robinson も 1908 年に刊行された *Advent Lectures* において前注に挙げた Bernard と同じ結論に至っているという。残念ながらこの Robinson の論考は入手できていない。なお、Feltoe が検証した諸教会暦における使徒ヨハネに関する記述は『シリア殉教者暦』、『カルタゴ殉教者暦』における使徒ヨハネに対する言及から採用されたものであると考えられる (M.-É. Boismard, [1996], esp. 15-46) ので、本稿の目的には後者二つの殉教者暦の検証で十分であると考え採り上げない。

し示すとは限らない、と考えたのが Fr. Spitta である¹⁴。彼によると、兄ヤコブとともに使徒ヨハネが 43/44 年に死んだとすることは不可能である。何故なら、パウロはおそらく 53 年から 55 年頃に書かれたと思われるガラテア書 1.17 以下で、43 年ころに義人ヤコブ、ペトロ、そしてヨハネとエルサレムで会談したと述べているのだから、というのが Spitta の反論であった。

しかしながら 1918 年には、H. Latimer-Jackson がヘラクレオン証言 (Clem Alex *Strom* 4.9) やパピアス証言、シリア殉教者録に加えて、ニネベ近郊のキリスト教団司教アフラハトによる『迫害について』という史料 (343/4 年?) を挙げ、ゼベダイの息子ヨハネが殉教者として死んだという根強い伝承を無視することは「もはや不可能である」と主張した¹⁵。

けれども、ヨハネ自然死説に与する M.-J. Lagrange は 1925 年、以下のよう
にヨハネ殉教死説に反論を加えた¹⁶。「パピアスが、ヨハネはユダヤ人によ
って死に付された *Ἰωάννης ὑπὸ τῶν Ἰουδαίων ἀνῆρέθη*」と書いたことは困難なく認
められるだろうが、しかしこのヨハネはゼベダイの息子だろうか? その特定は
不可能である」。さらには、『カルタゴ殉教者暦』に関する Burkitt の議論に
も反論が加えられた。「洗礼者聖ヨハネと使徒聖ヤコブ、彼をヘロデが殺した
sancti Johannis Baptistae et Jacobi Apostoli, quem Herodes occidit」の
一文に関して、古代人たちはヘロデによって無実で首を切られた二人の人物を
quos Herodes occidit とまとめて記述したのだと Lagrange は考えた。つまり、
もともと『カルタゴ殉教者暦』に記念されているのは、洗礼者ヨハネだとい
うのである。

聖書緒論学領域の研究成果蓄積により、20 世紀後半には『ヨハネ黙示録』、
『ヨハネ福音書』、そして『第一』から『第三』まで存在する『ヨハネ書簡』
のそれぞれについて、その著者が使徒ヨハネであると考えた研究者は稀になっ
た¹⁷。これにより、『黙示録』(ドミティアヌス帝期以降に年代づけされる)¹⁸
に言及される「私、ヨハネ」のパトモス島滞在も、使徒ヨハネに関する史実だ
と確証することは困難となった。すなわち、現在の史料状況を前にした研究者
は、使徒ヨハネの自然死にせよ殉教にせよ、その史実を解明することは極めて

¹⁴ Fr. Spitta (1910), 39-58.

¹⁵ H. Latimer-Jackson (1918), 142-150.

¹⁶ M.-J. Lagrange (1925), xl-xlii.

¹⁷ 佐竹明 (2007), 48-65. cf. 荒井猷他 (1981) 189-91, 433-36, 439, 441-42, 468-89.

¹⁸ 保坂高殿 (2003), 304-7.

困難と言わざるを得なくなったのである。

しかしながら、ヨハネ自然死論者とヨハネ殉教論者は、史実の全面的な解明を果たすことは出来ないことは認めつつも、2つの伝承の蓋然性に関しては、強固に自分の立場を主張しつづけた。1967年、*New Catholic Encyclopedia*はヨハネの自然死を伝える伝承を支持して、ヨハネが早期に没したとする諸証言にも言及はするものの、それらを「現実的な価値は無い」と断じている¹⁹。

対して1983年、J.-D. Kaestliは、ヨハネが殉教死したという伝承が、ヨハネはエフェソスで平和に自然死したという2世紀以降に圧倒的に正当化された諸伝承に取って代わられたと論じた²⁰。1996年、M.-É. Boismardはヨハネ殉教死説を支える諸伝承をまとめ、その中でも特にパピアス証言と『カルタゴ殉教者暦』を中心的論拠として、早ければ43/4年に使徒ヨハネは殉教死していたと考えるべきだと改めて主張している²¹。Weidmannはこれに加えて、エウセビオスの『詩篇注解』において、使徒ヨハネの殉教死が示唆されていることを指摘している²²。しかしながらWeidmannも認めるように、これらの指摘が2世紀以降に描かれてきた、使徒ヨハネは自然死を遂げたという圧倒的諸証言を退け切っていないのも事実である²³。

近年、ヨハネ自然死伝承を支持する研究者も、ヨハネ殉教伝承を無視できないことを認めざるを得ないと考えているようである。2003年に刊行された*New Catholic Encyclopedia*の第2版は相変わらずヨハネ殉教諸証言を「現実的な価値は無い」としているが、記事末尾に、こんな言葉を新たに添えている。「彼の使徒職や、エルサレムあるいは（よりありそうだが）エフェソスでの死は、推量の領域にとどまっている。われわれはただ、こうした詳細に関しては、後の時代の、利害関係をもった諸関係者の証言しか持っていないのだ」²⁴。すなわち、史的ヨハネの最期のみならず、それが殉教によるのか否かについての全ての伝承を整理しようという試みは、現在のところ一端放棄されていると言えよう。2009年に刊行された『新カトリック大辞典』における「ヨハネ」の項目も、その生涯の閉じ方に関する諸伝承の解釈については悲観的かつ禁欲的に

¹⁹ R. E. Brown, (1967), 1005-1006.

²⁰ J.-D. Kaestli (1983), 320.

²¹ M.-É. Boismard (1996), esp. 10-13.

²² F. W. Weidmann (1999), 133, 135, and 135 n. 35.

²³ Weidmann (1999), 135.

²⁴ R. E. Brown/ F. J. Moloney (2003), 895-897.

断定を諦めている²⁵。

先行研究史を概観すると、ヨハネ自然死伝承派・殉教死伝承派は互いに自らの説の根拠となる史料を提示し、相手側の史料のもつ信頼性に対して批判を加えることで自らの蓋然性を主張している。こうした見解の一致しない諸先行研究と、互いに矛盾する伝承を伝える諸史料に対し本稿は以下のようなアプローチをとる。まず、この約150年間に上記のような研究者たちから挑戦を受けてきた、使徒ヨハネはエフェソスで自然死を迎えたとする古い定説を支える諸史料を一瞥する。次に、この古い定説に加えられた様々な批判を振り返る。そのあとに使徒ヨハネの殉教死を主張する諸史料をこれに対峙させる。しかしながらその後本稿が目指すのは、どちらの史料群（およびそれが依拠する伝承）がより蓋然性を持つのかという判断ではなく、矛盾する両伝承が古代世界で共に存在するようになった状況を説明することであり、両者が整合する可能性のある解釈の提案である。

3. 自然死伝承史料群

第2章冒頭で述べたように、ヨハネの長寿説を唱える代表的な古代の証言者は、小アジアのスムルナ出身で、180年ごろにガリアのルグドゥヌム司教となったエイレナイオスである。エイレナイオスは使徒ヨハネがドミティアヌス帝期(51-96)に『ヨハネ黙示録』を書いたと主張しており²⁶、その後トラヤヌス帝期(98-117)までエフェソスに滞在したと述べる。

「ともあれ、エフェソスにある教会、これはパウロによって創立され、またヨハネがトラヤヌス帝の時代までそのもとに留まった教会であるから、これも使徒たちの伝承の真の証人である²⁷。」

このヨハネのエフェソス滞在については、2世紀半ばから3世紀初頭のアレクサンドリアで活躍したキリスト教学者、アレクサンドリアのクレメンスも同様に伝えている。

「使徒ヨハネは暴君〔ドミティアヌス〕の死後、パトモス島からエフェソスへと帰還した。そして彼は招きにより周辺の諸族をも歴訪し、求められればある土地

²⁵ 清水宏 (2009), 1168-1169.

²⁶ Irenaeus, *AdvHaer* 5.30.3; Eusebius *HE* 3.18.

²⁷ Iren *AdvHaer* 3.3.4; cf. 2.22.3.

には司教を立て、ある土地では教会全体を和解させ、またある土地では霊によって示された者の一人を牧者に任命していた²⁸。」

4世紀のキリスト教歴史家カレサレアのエウセビオスはエイレナイオスとクレメンスの証言をまとめて引用している。

「この頃〔トライアヌス帝期〕イエスの愛した使徒であり福音伝道者だったヨハネは、アジアでまだ生きており、そこの教会を監督していた。彼はドミティアヌスの死後、島への追放から戻っていたのである。ヨハネがその頃まで生きていたことは、二人の証人の言葉によって十分に証明されるだろう。その二人とは他ならぬエイレナイオスとアレクサンドリアのクレメンスである。」²⁹

エイレナイオスよりも古い時代の証言としては、アントニウス・ピウス帝期にローマ市で活躍した（100年?-162年?）教父ユスティノスがある。

「そしてさらに、私たちとともにある男がいた。その者の名はヨハネ、キリストの使徒の一人であり、彼に示された黙示によって予言をした。」³⁰

カエサレアのエウセビオスによる言及のみの伝存を含めれば、ヨハネがエフェソスに滞在したという内容の証言はさらに多い。エウセビオス以外には裏づけがないが、ローマのアポロニオス（?-185頃）³¹、エフェソスのポリュクラテス（?-190頃）³²が証言しているとされる。また、3世紀までに成立していた外典文学『ヨハネ行伝』は、エフェソスでのヨハネの奇跡譚に多くのページを割いている³³。そして、そこに描かれるヨハネは老境に至った人物である³⁴。

ラテン教父にも目を向けてみよう。ヒエロニムスは上記のエイレナイオスやアレクサンドリアのクレメンス、エウセビオスらの諸証言と同様に記している。

「ネロの後40年、ドミティアヌスが第二の迫害を起こした中、彼はパトモス島に追放された、そして黙示録を書いた、これに関しては殉教者ユスティノスとエイレナイオスが後に言及している。しかしドミティアヌスは殺され、彼の行為は彼の過度の残忍さの理由で、元老院により取り消された。彼はペルティナクス統

²⁸ Clem Alex *Quis Div Sal* 42. 訳は秋山学（1995）、461による。亀甲括弧〔 〕内は著者が挿入した。

²⁹ *HE* 3. 23. 以下エウセビオス『教会史』（Eusebius *HE*）の邦訳は秦剛平（1988）による訳を用いた。

³⁰ Justin *Dial* 81. 4. エウセビオスはユスティノスのこの箇所も引用している。*HE* 4. 18. 6.

³¹ Eusebius *HE* 5. 18. 14.

³² Eusebius *HE* 5. 24. 3.

³³ *Acta Ioannis* 19-54, 62-115. 節番号は R. A. Lipsius / M. Bonnet (1959) に拠る。cf. 大貫隆訳「ヨハネ行伝」および「解説」（＝荒井献他[1997], 97-172, 484-490）。

³⁴ ヨハネの肖像画に描かれているのは「老人」である。*Acta Ioannis* 27-28.

治下のエフェソスに戻り、そこで皇帝トラヤヌスの治世のときまで、アジア全体に諸教会を設立し建て続け、そして、老年に疲れ、われわれの主の受難から 68 年で死に、同じ都市の近くに埋葬された。」³⁵

また最初期のラテン教父テルトゥリアヌスも以下の証言から、ヨハネ自然死伝承の担い手と見なされてきた。

「ポリュカルポスはヨハネによってスミュルナの教会にたてられた、ちょうどローマで、クレメンスがペテロに叙任されたように。」³⁶

ここに述べられているスミュルナ司教ポリュカルポスは 69/70-155 年頃の人物であり、またローマ司教クレメンス 1 世の就任は 91 年頃と考えられているので、テルトゥリアヌスによるこの箇所はドミティアヌス期までは使徒ヨハネが生きていたという証言に数えられるのである³⁷。

ここまで見てきた史料群における要素をまとめると以下ようになる。すなわち、使徒ヨハネはドミティアヌス帝の時代に小島(パトモス島)に追放され、ドミティアヌスが暗殺された後追放から戻り、その後属州アジアのエフェソスに住んで長生きし、自然死を遂げたというものである。これが、本章で見た史料群をもとに 19 世紀まで定説として伝統的に受け入れられて来た伝承である。しかしながらこうした多数の教父たちの証言には、近代以降様々に疑問が提示されてきた。

19 世紀後半から唱えられた使徒ヨハネ殉教死説は、根拠となる諸史料(第 4 章で考察予定)を古い定説に対して突きつけただけではない。近代の研究者た

³⁵ Hierom *Vir III* 9.

³⁶ Tert *Adv Omn Haer* 32. 2.

³⁷ テルトゥリアヌスは引用史料以外にもヨハネの死について興味深い言及をしている。 *De anima* 50: 「ヨハネですら死を経験したのだ、彼は主の来臨まで生き続けるであろうという根拠のない期待が広がっていたけれども」; *De praescriptione haereticorum* 36): 「かの教会[ローマ教会]はいかに幸せなことだろう…そこで使徒ヨハネはまず投げ込まれたのだ、煮えたぎる油の中に、無傷で。そしてそれ故に小島へと追放されたのだ」。併せ見れば、これらの証言は、ヨハネが不死かと思われるほど長命だったという意味にも読めるかもしれない。しかしながらテルトゥリアヌスが確言しているのはヨハネが死んだということだけである。むしろ、この一文はヨハネ 1.23 において証言される、「愛された弟子」は死なないという 1 世紀末のキリスト教徒の間の噂に言及しているのだろう。この「噂」の問題には関しては R. Bultmann, (1971), 716. 『ヨハネ福音書』における「愛された弟子」が使徒ヨハネであるか否かに関しては確たることが言えない。H.-T. Schenke (1986), 115. また Beasley-Murray はこの箇所成立期までに「愛された使徒」がエフェソスで自然死していたことを想定している。G. R. Beasley-Murray (1987), 410.

ちは、ヨハネ自然死伝承を伝える史料に対する史料批判を展開した。すなわち、エイレナイオス、アレクサンドリアのクレメンス、テルトゥリアヌスおよびエウセビオスらの古代教父たちが、以下に見るように何らかの動機を持ってヨハネが殉教死せず（そしてこれが重要なのであるが）長生きしたと証言したのだと主張したのである。

エイレナイオスにとっては、使徒ヨハネが長寿であることは以下の二つの点で彼に有利であった。すなわち、現在「第四福音書」ないし『ヨハネ福音書』と呼ばれている書物が使徒ヨハネの著作であると主張すれば³⁸、それ以外の書物の権威を主張していた彼のライバルであるいわゆる「グノーシス派」に対して優位に立てるという点³⁹。もう一つは、彼の師にあたるポリュカルポスが使徒ヨハネの直弟子であったと主張すれば、その使徒からの権威継承をもって、いわゆるカトリック派およびいわゆる「グノーシス派」両方に対して優位に立てるという点である⁴⁰。彼の二つの主張は当時キリスト教徒内で真偽が議論されていたのであるが、エイレナイオスの主張の大前提としては使徒ヨハネが（若き日のポリュカルポス師に教えを与えられるほど、第四福音書を編集できるほど）長生きでなければならなかったのである⁴¹。

アレクサンドリアのクレメンスについては、使徒ヨハネが活発に司教叙任をしていたと報告することを重視して、そうした使徒に任命された司教たちの存在を、「伝えられ、伝承に保持された」物語の中で語ることが長寿強調の目的だったのだとする解釈をする研究者も存在する⁴²。

³⁸ これら『ヨハネ黙示録』および『ヨハネ福音書』、ならびに第一から第三の『ヨハネ書簡』といういわゆるヨハネ文書の著者を特定することは本稿の枠組を超えているため、別の機会に委ねたい。

³⁹ R. A. Culpepper (1994), 123; Boismard (1996), 67; Weidmann (1999), 129-131.

⁴⁰ E. Schwartz (1905), 33; P. Corssen (1904), 302; H. Koester (1995), 138; B. H. Streeter (1929), 99; Weidmann (1999), 129-131.

⁴¹ エイレナイオスがこうした動機を自覚していたかは証明することはできないが、少なくとも彼が使徒ヨハネとポリュカルポスの関係についての記憶に関して混乱している可能性は非常に高いと言わねばならない。C. K. Barrett (1978), 105; W. R. Schoedel (1967) 3; A. H. McNeile (1953), 282-284; R. H. Charles (1920), xlix.

⁴² Weidmann (1999), 131. しかしながら、クレメンスはどちらかと言うと、司教制度からは完全に独立したキリスト教教師として活動していた。G. Bardy (1937), 65-90; D. Dawson (1992), 219-22. D. Brakke (2006), 257 はクレメンスが自分の師たちは「祝福されし教義の真の伝統をベトロ、ヤコブ、ヨハネとパウロ、聖なる使徒たち」(Strom. 1. 1. 11. 3) の系譜に学んだと主張し、4人の使徒の名を同時に挙げはするものの自分の直接の師の名を挙げないことを指摘して、これがいわゆる「カトリック」および「グノーシス」双方に見られる、特定の使徒の系譜に自らを位置づけて自己権威化を行う方法

テルトゥリアヌスがヨハネ長寿伝承を支持する動機は、エイレナイオスと同じ延長線上にあるとされた⁴³。重要なキリスト教共同体の基礎には使徒が関わっていたと決め付けたいがために、エイレナイオス証言と小アジアに残るヨハネ伝承とを整合させた証言をした可能性が指摘されるのである⁴⁴。

エウセビオスに対しては、エイレナイオス同様、あるいは更に悪質な歪曲証言だという強い非難が浴びせられている。彼の作為の動機として想定されているのも、第四福音書の執筆を使徒ヨハネに帰すことである。そして彼の場合、使徒ヨハネの殉教を証言していたとされるパピアスの『主の言葉の説明』から、その殉教証言を削除して引用したという史料改竄の疑惑が掛けられているのである⁴⁵。

以上に概観したごとく、主に教父たちの著作に証言される使徒ヨハネ長寿伝承に対しては、その担い手たちに読み取られる政治的動機から強い批判が浴びせられてきた。そしてその動機説明にはそれなりの説得力が備わっているのである。

4. 殉教伝承史料群

次に、使徒ヨハネが早期に殉教していたとする証言を以下に挙げる。最初に挙げるのはその中でも最も成立年代が早いパピアスの証言である。パピウスは先述したエイレナイオス(130頃-200年頃)の同時代人とされている。彼は『主の言葉の説明』と題した書物を著したが、残念ながら散逸している。わずかに引用の形で伝存している箇所⁴⁶が、使徒ヨハネの殉教死を証言しているとされる。5世紀の教会史家シデのフィリップスと、9世紀の歴史家ゲオルギオス・

へのあてつけだと主張する。クレメンスは「たとえ人間によって任命されていなくても」(Strom. 6.13.106.1-2)「完全に、かつ知性的(グノーシス的)に生きた」者は「真に教会の長老」であると主張している。

⁴³ M. Hengel (1989), 153 n. 90: 「エイレナイオスによる発言を偏向的方法で引き伸ばした」。

⁴⁴ Weidmann (1999), 131. テルトゥリアヌス『マルキオン派駁論』4.5.2「われわれはまたヨハネにより育てられた諸教会を持っている…それらの教会の司教たちの系譜は、その起源を迎れば、設立者ヨハネに端を発することがわかるだろう」等が併せて引用される。

⁴⁵ M. Hengel (1989), 21; R. W. Schoedel (1967), 117-121; H. Latimer-Jackson (1918), 142-150; Th. Zahn (1900), 103 n. 1. さらなる参考文献はKaestli (1983), 320 nn. 4-5. この問題は下記第4章で論じる。

⁴⁶ パピウス断片の邦訳は佐竹明訳(荒井献他[1998]所収)を使用した。

ハマルトロスによる引用では以下のように記される。

「ヒエラポリスの司教で、神学者ヨハネに聞き、またポリュカルポスの友人でもあるパピアスは、『主の言葉』5巻を書いた。その中で彼は使徒たちを数え上げ、ペテロとヨハネ、フィリポとトマスとマタイに続けて、アリストイオンともう一人のヨハネ—それを彼は長老とも呼んだ—をも主の弟子たちとして記した。(中略)パピアスは第2巻で、神学者ヨハネと彼の兄弟ヤコブとはユダヤ人たちによって死に付されたと述べている。」⁴⁷

「ドミティアヌスに次いで、ネルウァが1年間治めた。彼はヨハネを島から呼び戻し、エフェソスに住むことを許した。当時彼は十二弟子中ただ一人の存命者であって、彼の名による福音書を書いたが、彼は殉教に相応しいと見なされていた。というのは、ヒエラポリスの司教で、この人物の目撃者であるパピアスが、『主の言葉』の第2巻で、彼はユダヤ人によつて殺されたと主張しているからである。(中略)同様に博学のオリゲネスも『マタイ福音書注解』の中で、ヨハネが殉教したということを、自分はそれを使徒たちの後継者たちから聞き知ったとほのめかしながら、確証している。また博識のエウセビオスも『教会史』の中で、「トマスはパルティアを、ヨハネはアジアを割り当てられた。彼はそこで生活し、エフェソスで死んだ」と言っている。」⁴⁸

上記の二つ⁴⁹は、二人の引用者が5世紀および9世紀の人とは言え、パピアス自身は2世紀の人物であり、明瞭に「ユダヤ人による殺害」を示唆している以上、使徒ヨハネ殉教の強力な証言であると見なされてきた。しかしながら、管見ではこの史料は使徒ヨハネの殉教の確証とはならない。Lagrangeは「パピアスが *Ἰωάννης ὑπὸ τῶν Ἰουδαίων ἀνιπρόθη* (ユダヤ人によつて死に付された) と書いたことは困難なく認められるだろうが、しかしこのヨハネはゼベダイの息子だろうか?この特定は不可能である」と述べる⁵⁰。さらに言えば、われわれはパピアスがここで述べているヨハネとは使徒ヨハネではないと考えている。その理由は、エウセビオスは前述したごとく使徒ヨハネ長寿伝承を支持し、また使徒ヨハネに関してパピアスを引用しながらも使徒ヨハネ殺害に関する

⁴⁷ シデのフィリッポスは5世紀前半に『教会史』を著した。当該のパピアス断片が残る写本 Codex Baroccianus142 は7/8世紀に成立。

⁴⁸ ゲオルギオス・ハマルトロスは9世紀にミカエル3世下のコンスタンティノポリスで『年代記』を書いた。当該のパピアス断片は写本 Codex Coislinianus 305 に引用される。

⁴⁹ Boismard (1996), 56 の分析によれば、この両者は別々にパピアスの『主の言葉の説明』を読んで互いに独立に自分たちの書物を記したのではなく、ゲオルギオス・ハマルトロスがシデのフィリッポスに依存している。ゲオルギオス・ハマルトロスはパピアス断片とオリゲネス証言、エウセビオス証言を矛盾する、混乱した形で引用している。この点に関しては第6章で論ずる。

⁵⁰ M.-J. Lagrange (1925), xl-xlii.

記事の存在など匂わせてはいない点にある。

少なからぬ研究者たちが、エウセビオスはパピアスにおける、ユダヤ人によるヨハネ殺害記事を知っていたのに、敢えてヨハネ長寿を主張するためにこれを削除して引用したのではないかと疑った⁵¹。けれども、一度は同じ疑問を抱いた Culpepper は、エウセビオスによるパピアスの改竄引用は「エウセビオスがパピアスの 5 冊の著作は今尚入手可能であると前提しているゆえに受容れることが困難である」⁵²と自らに答えている⁵³。つまり、エウセビオスにはパピアスの著書内容を無視してこれと矛盾するヨハネ長寿論を展開する余地は無かったということになる。ひいては、シデのフィリポスが引用（し、さらにゲオルギオス・ハマルトロスが孫引き）したパピアス断片における「ユダヤ人によるヨハネ殺害」は、使徒ヨハネと異なったヨハネのことを指していると考えねばならない⁵⁴。それゆえパピアス断片史料は使徒ヨハネ殉教問題からは除外されるべき史料となるのである。

管見では、エウセビオスは使徒ヨハネの殉教や死に関しては、彼が入手した史料を単純に引用したり言及したりしているのみであると思われる。何故ならばエウセビオスはエイレナイオスやアレクサンドリアのクレメンス、さらにはユスティノスら多くの教父に基づいて使徒ヨハネの長寿を語っているが（そしてその前提に基づきヨハネ文書の著者を使徒に帰しているが）、使徒ヨハネの殉教を肯定するかに見える記述も複数残しているのである。

335 年以降に書かれた同じエウセビオスの『詩篇注解』は、旧約聖書の『詩篇 71 (72)』第 14 行「暴行と暴虐から彼らの魂を彼が贖い、彼らの血が彼の目に貴ばれますように。」⁵⁵の一節に関して以下のように述べている。

「そして福音の書物はこのように述べている。『イエスはこれらの者を 12 人選び出して、彼らを使徒と名づけた。』⁵⁶ それより以前に、ヘブライ語の経典は、

⁵¹ 第 2 章参照。

⁵² R. A. Culpepper (1994), 155.

⁵³ HE 3.39: 「パピアスの 5 巻の著作は現存し、それには『主の託宣の解釈』という題がついている。」

⁵⁴ ヨハネという名はヘレニズムおよびローマ時代に良く用いられたユダヤ人名であった。D. E. Aune (2001), 540.

⁵⁵ ただしエウセビオスはギリシア語に翻訳された『七十人訳』のテキストを主に念頭においている。松田伊作(1998), 188 注 2 「彼らが彼らを死なせることのないように」の意(詩篇 116.15, サムエル 26.21, 列王記下 1.13)。「血」(『七十人訳』では「名」)はここで「魂」と並行し、生命の象徴(『詩篇』94.21)。

⁵⁶ ルカ 6.13.

『彼らの名を』、『彼らの血を』という言葉をちりばめている。そして後の世の者たちはそれを以下のように解釈している。すなわちアキラは『かくて彼らの血が、人の眼差しの中で称賛されるだろう』、シュンマクスは実に、『かくて当時から人びとの前で彼らの血は尊崇されるべきであった』と。これらのことから、明らかに彼ら〔使徒〕の死は暗示されていたのだ。彼らのうち送り出された者は、多様な殉教の結末を甘受し、そして他の者は他の方法で殉教のため自分たちから与えられた血の競技会へと突き進んだ。」⁵⁷

ここではエウセビオスがヨハネを含めた使徒たちが殉教したと言及していることが確認される。また、『パレスチナ殉教伝』シリア語版写本序文にも、使徒たちがそれぞれ殉教のうちに生を閉じたという文言が存在する。

「当時、その時、彼の主の力に歓喜したパウロは、皇帝の都ローマの中心で殉教の勝利で自ら加冠したのである、何故なら彼はそこで至高の闘いとしての競技会に参加したのであるから。このキリストが彼の勝利を収めた殉教者にも与えた勝利において、弟子たちの長にして第一の者、シモンも同様に冠を受けた。そして彼は我らの主の受難と同じ仕方を受難したのである。使徒たちのうちの他の者たちも、他の諸々の場所で、殉教のうちに彼らの生を閉じた。」⁵⁸

ここでさらに、エウセビオス以外のヨハネ殉教説の根拠となる史料を見ていこう。おそらく3世紀半ばから、教会は殉教者の殉教日を信仰上の意味での誕生日として積極的に祝うようになる。この記念日をまとめたものを『殉教者暦』と呼ぶが、411/412年にシリアのエデッサで作成された『シリア殉教者暦』には、使徒ヨハネの殉教が、彼の兄弟ヤコブとともに記録されている⁵⁹。

「ギリシア人によれば26日、最初のエルサレムでの殉教者ステファノ、使徒、
殉教者の頭
および27日、ヨハネとヤコブ、使徒たち エルサレムで
および同じ第一カヌーンの月28日、ローマ市で使徒パウロとわれらが使徒の頭
シメオン・ケファ
および同じ月の30日、霊祓い師ヘルマスがボロニア市で殉教者になった」⁶⁰

使徒ヨハネの殉教を示唆する殉教者暦史料はこれだけではない。505年までに成立した『カルタゴ殉教者暦』も、6世紀末頃に成立しヒエロニムスの名を冠した『ヒエロニムス殉教者暦』も、ヨハネという名前を、殉教を記念する教会暦に書きこんでいるのである。

⁵⁷ PG 23. 812B-C (*Comm Psalm*).

⁵⁸ W. Cureton (1861), 3による Eus MPシリア語写本からの英訳を利用した。

⁵⁹ F. C. Burkitt (1907²), 252-256. Burkittは『カルタゴ殉教者暦』におけるヨハネの名の発見者でもある。

⁶⁰ 保坂高殿 (2005), xviii-xix; H. Lietzmann (1911²), 7-15.

- 「26日 最初の殉教者 聖ステファノの日
 27日 聖ヨハネ洗礼者⁶¹、および使徒ヤコブの日、彼をヘロデが殺した。
 28日 聖なる赤子たちの日、彼らをヘロデが殺した。」⁶²

- 「12月27日 聖職位階である聖ヤコブ、主の兄弟、はユダヤのエルサレムから使徒たちの第一位であり教会を持つ司教である。そして福音記者聖ヨハネのエフェソス市民への養子縁組の日。その墓はマナが注がれる。
 12月28日 使徒聖ヤコブ、福音記者の兄弟、の誕生日〔殉教の日〕」⁶³

ただここで注意が必要なのは、『カルタゴ殉教者暦』における12月27日の「彼をヘロデが殺した *quem Herodes occidit*」という、単数形の代名詞を目的語にもった一節である。すなわち、この日ヘロデに殺されたのは使徒ヤコブ一人であり⁶⁴、ヨハネの殉教がこの日に記念されていることはヤコブとは別の理由による（すなわちヘロデによる殺害によらない）という点である。

また、Latimer-Jacksonによれば、ニネベ近郊の司教アフラハトによる説教『迫害について』は343/4年頃成立したと考えられるが、これも使徒ヨハネとヤコブの殉教をセットで伝えている⁶⁵。

「偉大で卓越しているのはイエスの殉教である。彼はそれ以前あるいはそれ以後の全ての者に、苦痛と告白の点で勝っている。そして彼の後にはユダヤ人に石打ちにされた信仰心あふれる殉教者ステファノがいる。またシモン〔ペテロ〕とパウロも完全な殉教者である。そしてヤコブとヨハネは彼らの主人キリストの足跡を辿った。また〔他の〕使徒たちもその後様々な場所で告白し真の殉教者であることを証明したのである。」⁶⁶

⁶¹ 「洗礼者 *Baptistae*」は「ヘロデが殺した *quem Herodes occidit*」に誘発された写本伝承上の誤り（保坂[2005], xvi）。『ヒエロニムス殉教者暦』では「福音書記者」、『シリア殉教者暦』では「使徒」と記されている。Boismard (1996), 28が指摘するごとく、同じ『カルタゴ殉教者暦』7月24日にも「洗礼者ヨハネ」が登場している故この解釈は有力である。同n.1にはこの解釈を推す研究者たちへの言及。ちなみに『シリア殉教者暦』においては洗礼者ヨハネに関しての記述がない。

⁶² H. Lietzmann, (1911²), 4-6.

⁶³ PL 11. 436D (*Martyrologium Hieronimianum*).

⁶⁴ cf. *Acts* 12:2.

⁶⁵ H. Latimer-Jackson (1918), 142-150. Latimer-Jackson はヘラクレオンの発言も、使徒ヨハネが殉教していることの証拠と考えた。しかし言及されている使徒たちの中にはヨハネの名が無い。Clem. Alex. *Strom*, 4.9. 71.1-4 (テキストは O. Stählin, [1985], 280): *οὐ γὰρ πάντες οἱ σωζόμενοι ὁμολόγησαν τὴν διὰ τῆς φωνῆς ὁμολογίαν καὶ ἐξῆλθον, ἐξ ὧν Ματθαῖος, Φίλιππος, Θωμᾶς, Λευὶς καὶ ἄλλοι πολλοί. καὶ ἔσυν ἡ διὰ τῆς φωνῆς ὁμολογία οὐ κθολικὴ, ἀλλὰ, μερικὴ.*

⁶⁶ *Patrologia Syriaca* (Paris 1894, tom.1)におけるシリア語テキストから John Gwynn が英訳したものを使用した。P. Schaff (1898), 401-402.

これらの史料群を見て分かるように、1918年に Latimer-Jackson⁶⁷ が述べたこと、すなわち、「使徒ヨハネの“血の殉教”に関する物語を“信じるに値しない”と無視することはもはや無理である」という指摘は、ますます今日重要になってきている。しかしながら、これまでも見たように、少なくとも、ヨハネが自然死したという伝承が2世紀から複数存在していたことも事実であり、様々な先行研究によってなされた伝承史料に対するテキストクリティークも、その存在を完全に退けることはできていないのである。この一見矛盾する二つの伝承を整合的に解釈するためには、伝承が用いた殉教に関する用語法が変化していることを理解する必要がある。

5. 用語法の変遷

前章末で述べたように、われわれの前には互いに異質に見える二つの伝承と、それを支える二つの史料群が横たわり、互いに互いを駆逐できずにいるかに見える。そこで本稿では、どちらの説がより蓋然性を持つのかという排他的な視点ではなく、これまで見た両説の依拠史料群が両立可能な解釈法を試みたい。これまで見てきた史料は、使徒ヨハネに関する記述であることが疑わしいパピラス証言を除けば、必ずしも他方を完全に否定する主張をしているわけではない。使徒ヨハネが自然死したと主張する史料群（上記第3章を見よ）は使徒ヨハネが「殉教をしていない」という主張はしていないし、使徒ヨハネが殉教したと主張する史料群（上記第4章を見よ）は使徒ヨハネが「長生きではなかった」という主張はしていない。

第2章の研究史整理においても触れたが、Bernard と Robinson はわれわれに重要なヒントを与えてくれている。すなわち、使徒ヨハネは単に、後に「告白者」として信仰のため実際に殺された者から区別された者を含む古い用語法での「殉教者」として呼称されたのだ、という解釈である⁶⁸。

まず、Bernard と Robinson のヒントに従って、「殉教者」という用語法を振り返ろう。彼らが言うように、2・3世紀までの史料では、しばしば生存中にも関わらず「殉教者」の称号を持つ人物が何人か存在する。保坂高殿は先行研

⁶⁷ Latimer-Jackson (1918), 150.

⁶⁸ 上記第2節。また同章に挙げた Ewald も参照。

究が指摘するこうした生ける殉教者に関する史料を検証し、2・3世紀においては信仰故に受難死した者だけが排他的に殉教者と呼ばれたわけではなかったことを明らかにしている⁶⁹。例えば177年、ルグドゥム迫害で野獣に投げられながらも生き残った人々のことを、迫害報告書簡の執筆者はこう述べる。

「彼らは自分たちのことを殉教者 *μάρτυρες* であると宣言もしなければ、われわれが彼らをこの名称で呼ぶことも許容しなかった。もしわれわれのうちの誰かが手紙で、あるいは口頭で彼らのことを殉教者 *μάρτυρες* と呼ぼうとすれば、彼らは厳しくその人を咎めた。…『私たちは卑しく、取るに足らない告白者 *ὁμολογοί*⁷⁰ に過ぎないのです。』」⁷¹

ここで注意すべきことは、書簡執筆者は未だ獄中であって判決執行を待っている生存中のキリスト教徒を殉教者 *μάρτυρες* という称号に値すると見なしており、当然受け取られて良いその称号を彼らが辞退したことについて、書簡執筆者が彼らの謙譲に感嘆している点である。つまり、当時のキリスト教徒たちにとって、生存中に殉教者と呼ばれることは慣習化していたことが示唆される。例えば180年代に司教たちが書いた反モンタニズム推薦状には、「私、アウレリウス・クイリニウス、殉教者 *μάρτυς* はあなた方の健勝を祈る」という署名がある⁷²。また、ヒッポリュトスは188-189年の事件として後のローマ司教カリストゥスがサルディニア島に追放されたとき、島には多数の生ける「殉教者」がいて、後にコンモドゥス帝の愛人マルキアにより追放刑から救われたという。カリストゥス自身、この時の追放刑をして、自らの「殉教」にものをいわせて司教に選出されたといわれる⁷³。この時代、キリスト教徒たちにとって、殉教

⁶⁹ 保坂(2008), 251-94。保坂以前にも「生ける殉教者」の存在を了解している研究者は複数存在したが、「殉教者」の定義を信仰故の死者と前提し続けるため、存命にも拘わらず「殉教者」の称号を得ている古代キリスト教徒の存在を説明できていない。H. Delehay (1927), 74, 89; G. Krüger (1916), 247f. なお、豊田浩志(2002), 260には「古くは、同じ受難者でも、単に拷問を受けただけの者、鉱山労働や追放処分に服役した者で、死を免れた場合すら殉教者と呼ばれた例が多々あった…」とある。M. Sage (1975), 186-189 および S. G. Hall (2006), 472-474 は生存しているにもかかわらず殉教者称号を持つキリスト教徒の存在を、デキウス迫害以前には殉教者と告白者との区別が曖昧であったと解釈する。

⁷⁰ 後に教会用語に採用される *ὁμολογητής* という用語がこの当時はまだ存在しなかったゆえ、彼らは個人的にこの変則的な単語を用いたのであろう。保坂(2008), 267-268。

⁷¹ Eusebius *HE* 5. 2. 2-3.

⁷² Eusebius *HE* 5. 3. 4-5. 4. 2.

⁷³ Hippolyt *Refutatio omn. haeresium* 9. 12. 9-10。その他、生存しながらも殉教者の称号で呼ばれた例は保坂(2008), 264の表10を見よ。

者とは信仰のために死亡した者のことではなく、法廷で信仰告白を貫徹した者という概念であった。元来「証言者」を意味する法廷用語 *μάρτυς* がそれを示すために採用された理由もそこにある。

それでは、告白者 *ὁμολογητής* という用語はどのように定義されるのか。3世紀初頭のローマ教会における慣習を相当程度反映していると考えられるヒッポリュトスの『使徒伝承』には次の文言がある。

「主の名のために捕らえられて告白者となった場合、その人を助祭または長老とするために按手する必要はない。その人は告白によって長老の誉れを受けているからである。ただし、司教に立てられる場合には、その人に按手がなされる。また、告白者が権力者の前に引き出され、逮捕、投獄、その他の刑罰を受けたりすることもなく、ただ主の名のためにのしられたり、私的な罰を受けたりした場合は⁷⁴、たとえ告白をしたことがあったとしても、いずれの役務であれ、ふさわしい者とされるためには按手される。」⁷⁵

すなわち、法廷やその予備審問において「告白によって」投獄されたキリスト教徒が、「告白者 *ὁμολογητής*」称号を得るのである⁷⁶。その後さらに、有罪判決を得た者は殉教者 *μάρτυς* の称号を得ることになるが、その条件は受難故の「死」にはなかったことが3世紀半ばまで確認できる。カルタゴ司教キプリアヌスは、有罪判決を受ける前に獄中で死亡してしまった者たちを、殉教者としての待遇をして、その死去日を殉教者暦に記入すべしという書簡を書いている。

「あなた方は判決を受けずに獄中で栄光ある死を遂げた者たちの遺体に対し特別の手厚い取り扱いをするべきです。何故なら彼らの勇気 *virtus* と栄誉 *honor* は彼らを至福なる殉教者の列に加えてよいほどに、劣りはしないものだからです。そこで彼らの死去した日を記憶しなさい。われわれはそれで彼らの記憶をわれらが殉教者たちの記念に含めることができるでしょう。」⁷⁷

⁷⁴ 保坂(2008) 260 n. 30 は法廷外告白者に関する規定は他の文献に登場しないためヒッポリュトスの個人的見解と解する。しかし Clem Alex *Strom* 4. 9. 71. 2 のヘラクレオンによる非難「多くの者は権力者当局の面前での言葉による告白を誤って唯一の告白と思っている」は古カトリシズムにおいて一般的に法廷告白が特に重視されていたことを示唆している。Cf. *Cyp Laps* 3f.

⁷⁵ *Traditio Apostolica* 9. B. Botte (1972⁴) によるコプト語テキストからのラテン語訳から重訳した。オリジナルはギリシア語であったが散逸した。

⁷⁶ 保坂(2008) 270-71 はセヴェルス朝期におけるキリスト教徒釈放数の増加にともない、告白を奨励する教会には、有罪判決を得て殉教者称号を得るには至らずに釈放された信徒も顕彰する必要があったからと説明する。釈放に関する史料例は Hippolyt *Comm in Dan* 2. 35. 6, 2. 37. 2, 2. 37. 1; Eusebius *HE* 6. 8. 7, 6. 11. 5; *Cyp Ep* 10. 5; Lucian, *Pereg* 14.

⁷⁷ *Cyp Ep* 12. 1. 2-2.

彼らの勇氣 *virtus* と榮譽 *honor* は「殉教者の列に加えしめることのできる」ほど大きい、等の理由付けがわざわざなされているということ自体、キプリアヌスの指示内容が当時の一般的規則にはなかったことを示している。当時は、信仰のために獄中死したとしても、それだけでは殉教者称号の十分条件を満たしていなかったということである。

反対にキプリアヌスは、死を免れた者たちでも「殉教」をしたと明言する。

「かの3人の若者たちの場合、殉教の尊厳はまったく減少しない。燃えるかまどから出てしまい、死を妨げられたのだ。(中略)キリストの告白者たちにおいて、彼らの殉教が延期されているという事実は彼らの告白の功績を損ないはしない。むしろ、われわれの神の保護の素晴らしい仕事を明らかにするのに役立つのである。」⁷⁸

このように、キプリアヌスの時代までは、法廷での信仰告白を行ったキリスト教徒を告白者とよび、その後有罪判決を受けた者を殉教者と呼ぶ一般的規則が教会にあったことがわかる⁷⁹。有罪判決を受ける前に獄中で死去してしまった者は一般規則上では殉教者の称号を得られないため、キプリアヌスは書簡12において彼らを殉教者とするべく特別な指示を出しているのである。反対に、死亡していないとも、そして何らかの理由で釈放されても、有罪判決を受けた者は殉教者の称号を受け、自らその称号を署名に用いることが認められたのであった。

キプリアヌスの時代までは確認できた、生死を基準としない殉教者称号の付与条件規則はいつごろ現代のわれわれが持つ殉教(死)概念へと変化したのだろうか。257年、自らもクルピス市に追放されたキプリアヌスは、自分を告白者とのみ述べる⁸⁰。これはキプリアヌスが受けた追放刑が最終的な有罪判決でなく、棄教を促すための行政措置だったからであり、事実彼は1年後に追放先でなくカルタゴで処刑が決定される⁸¹。3世紀半ば以降、帝国当局のキリスト教徒対策は、即刻処刑ではなく棄教を引き出すための追放・長期投獄・鉱山労働などを経て、再度拷問を伴う棄教勧告を行い、それでも信仰を捨てないキリスト教徒を断罪・死刑に処するという形態をとるようになった⁸²。キプリアヌ

⁷⁸ Cyp Ep 61. 2. 1.

⁷⁹ 保坂(2008), 263-274.

⁸⁰ Cyp Ep 81. 1; Act Cyp 1. 4.

⁸¹ Act Cyp 4. 3.

⁸² 保坂(2008), 287-293; Eusebius *MartPal* (s) 7. 3, (*HE* 8. 13. 5), 7. 6, 8. 1, 9. 17, 11. 5, 11. 6, 11. 13, 13. 2; Lact *Inst* 5. 11. 15 (Eusebius *HE* 8. 10. 8); N. H. Baynes,

ス時代までに確認できていた殉教者および告白者の基準は、ここで何ら変化していない。法廷での信仰告白者は、追放・投獄・鉱山労働などの「暫定的措置」を受けた後、再度棄教を迫られる。「最後まで」信仰告白を貫徹すれば、そのキリスト教徒は棄教勧告を諦めた総督にとって死刑以外の選択肢が残されていない被告となり、3世紀半ば以降、教会内の一般規則は変更されていないが、殉教者の称号を得る者は死者のみにならざるを得なくなったのであった。

6. 結論

ここで、使徒ヨハネ伝承における殉教論争について結論を出そう。使徒ヨハネの長寿と自然死を伝える史料群は、使徒ヨハネの殉教を否定する文言を一切含まない。古い用語法を用いていたキリスト教徒たちにとって、使徒ヨハネは「殉教」していたのである。使徒ヨハネの殉教を示唆するとされた史料は、使徒ヨハネについて言及しているとはいえないパピアスの断片を除けば、使徒ヨハネの「殉教“死”」に言及しない。一方、ヨハネの殉教を伝える伝承史料群では殉教関連の語が古い意味で用いられているのであって、使徒ヨハネの死は念頭に置かれていなかったと考えられる。オリゲネスが244-49年の間に執筆した『マタイ福音書注解』の一節がまさにこのことを端的に表している。

「私の考えが受け入れられるならば、彼らは杯を飲んだ、そしてゼベダイの息子たちは洗礼をしたのだ、何故ならヘロデはヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺したのだから。しかしローマの皇帝は、彼に関しては甚だしい伝承があるが、自分の認めた真の言葉を証言したヨハネをパトモス島に追放した。これは彼の殉教に数えられる。」⁸³

ここでオリゲネスが述べていることが、使徒ヨハネの殉教問題に関する伝承の真相を鮮明に表している。使徒ヨハネが断罪され追放刑を受けたとする伝承は2世紀初頭には成立していた⁸⁴。2世紀までのキリスト教会における基準では、

675: 'the reluctance of governors to impose the death penalty is often striking'; Th. Mommsen (1899), 578 n.1.

⁸³ PG 13. 1385A-B (Orig *Comm Matt* 16. 6).

⁸⁴ しかしながら使徒ヨハネが実際にパトモス島へ追放されたという事実を立証することは難しい。パトモス追放伝承に纏わるわれわれが知る最も古い史料は『ヨハネ黙示録』であり、著者は自らがパトモス島にいたときに黙示録を書いたと述べる(1.9)。しかし著者ヨハネが使徒ヨハネと同一人物であるとする決定的な証拠は存在せず、使徒ヨハネ著者説は否定される傾向にある(佐竹明 [2007], 35-65)。その後のキリスト教史料におけるパトモス追放証言は『黙示録』著者を使徒ヨハネと前提した上で黙示録記

それを殉教と呼んだのである。すなわち、殉教伝承史料群は、自然死伝承史料群と互いになんら矛盾することなく両立可能な証言しか含んでいないことになる。

「殉教者」称号の付与がもはや信仰ゆえの刑死者にしか付与され得なくなっていく3世紀半ばより後、前時代の史料が「殉教」という用語に含めた「信仰ゆえに有罪判決を受けた者」の意味は次第に想起されなくなっていった。しかしながらエウセビオスの時代には、辛うじて両方の用語法が記憶されていたと言える。エウセビオスは『教会史』および『パレスチナ殉教録』で基本的に「殉教」の用語を現実の死に関連してのみ用いるが、使徒ヨハネに関連しては例外的にこの語を用いているのである⁸⁵。

「伝承によれば、この[ドミティアヌス迫害の]とき、使徒であり福音伝道者だったヨハネはまだ生きており、神の言葉を証したために有罪を宣告され、パトモス島に住んだ *τῆς εἰς τὸν θεῖον λόγον ἔνεκεν μαρτυρίας Πάτμον οἰκίαν καταδικασθῆναι τὴν νῆσον.*」⁸⁶

エウセビオスはここで *μαρτυρία* (秦訳では「証し」という用語を用いるが、これは単に『黙示録』の用語法を踏襲しただけではなく、既に引用したオリゲネスの『マタイ福音書注解』における使徒ヨハネのパトモス追放記事をも踏まえた表現であろう⁸⁷。すなわち、彼が「殉教」という用語に新旧二つの意味を込めて使い分けていたとすれば、第3・4章で見えてきた彼の引用史料における用語法は矛盾無く解釈可能である。しかしながら9世紀の人物であるゲオルギオス・ハマルトロスはこうした用語法変遷を知らず、第4章で引用したごとく矛盾する形でのパピウス、オリゲネス、エウセビオス引用を行ってしまったので

事に言及しているに過ぎない。F. W. Horn (2005), 149 は「われわれの知識範囲では、パトモスは帝政期には追放地でも流刑地でもなかった」という理由で黙示録著者「私、ヨハネ」のパトモス追放自体を疑う。たしかに活動本拠地エフェソスからおおよそ100kmと近接したパトモス島は追放地としては不適切かも知ない (cf. 保坂 [2003], 307-8)。ただ、黙示録著者は自らがパトモス島にいた理由を「神の言葉とイエスの証言とのゆえ *διὰ τὸν λόγον τοῦ θεοῦ καὶ τὴν μαρτυρίαν Ἰησοῦ*」と述べる。この理由付けの文言は同6:9 (神の言葉とその証言のため殺された人々) および20:4 (イエスの証言と神の言葉を伝えたため首を切られた人々) で用いられており (佐竹明 [2007], 46-47), ここから黙示録著者が自らのパトモス滞在理由をこれらの人々が体験した「証言[ないし殉教] *μαρτύριον*」に比肩させていることは確実である。

⁸⁵ 保坂 (2008), 287-293.

⁸⁶ HE 3. 18. 1.

⁸⁷ エウセビオスがオリゲネス『マタイ福音書注解』を全巻所蔵していたことに関しては HE 6. 36. 2. cf. 6. 25. 3.

ある。

研究者たちが使徒ヨハネ殉教説を根拠づけるために教え上げた史料群は、パピウス断片を除き、エウセビオス同様、既に「殉教」という用語が現実の死により強く結び付けられている時代に成立したもののばかりである。この史料群の各著者が「殉教」用語法の変遷をどのように認識していたかを確定することは本稿の域を超えているが、これらの証言には使徒ヨハネの死亡（殺害）状況をめぐる具体的記述が一切欠けていることは示唆に富む。すなわち、これらの史料群はすべて、先行する時代の史料や口伝伝承から、使徒ヨハネについては「殉教」という一般的な概念だけを継承し、これにのみ依拠して記述を行ったと推測される。

これにより、使徒ヨハネの殉教伝承および自然死伝承をめぐるあらゆる史料は、使徒ヨハネに関する記述ではないと考えられるパピウス断片史料を除いて、使徒ヨハネの「殉教」伝承が彼のパトモス追放伝承を意味すると解釈することにより、全て整合的に並立して存在していると言える。本稿はこれにより、使徒ヨハネの殉教伝承をめぐる論争を解決する一つの解釈法を提示した。同時に、ここまで行った考察により、「殉教」用語に込められていた「信仰により有罪とされる」という用語法は、エウセビオス時代まで一部キリスト教徒に保存されていたという事実を示し、殉教神学の発展過程解明に若干の寄与を行ったといえよう。この古い用語法が忘却されていく過程については次章「補遺」にて概観したい。

補遺：使徒職と殉教

使徒ヨハネの死と殉教にまつわる伝承に関して学者たちを混乱させてきたのは、2世紀から3世紀にかけて変化した「殉教」という用語の定義、あるいは殉教者称号の認定基準が帝国当局の対キリスト教徒政策の変化に従って変化したという歴史が未解明であったことによるものであった。しかしながら、この用語の変化という歴史が次第に忘れ去られたことと併せて、使徒ヨハネに関する伝承理解を混乱させた要素として、もう一つの思想潮流が古代教会に存在したと推測される。それは、「使徒は全員殉教（死）をしたはずである、あるいはするべきである」という思想である。

第5章で引用したエウセビオスの『詩篇注解』においては、各使徒が殉教を被ったはずである、あるいは被るべきであるという概念が2世紀に活動した旧約学者であるアキラを通じて2世紀前半の時点で存在したかのように思われるが、残念ながらエウセビオスがあの様に短い引用しかしていない以上、これは推測に留まる⁸⁸。しかしながら2世紀初頭、スミュルナのポリュカルポスは、おそらくローマで処刑されたと思われるアンティオキア司教イグナティオスらの処刑に際してこのように述べている。

「この忍耐はあなたたちが、至福なるイグナティオス、ゾンモ、ルフォスの三人の方々に際して、直接見たものですが、彼ら三人だけでなく、貴方たちの(フィリピ)出身の者にも、パウロ自身においても、また他の使徒達にも見られたものなのです。」⁸⁹

K. Rengstorf や W. Schmithals は、パウロの時代から、信仰のために受難することは使徒職の本質とされてきたと考えている⁹⁰。もっとも、W. Bauer はこうした思想が使徒ヨハネの殉教死伝承形成に与えた影響をそれほど高くは見積もっていない⁹¹。しかしながら、後代になるにつれて、使徒ヨハネの殉教伝承を問題視するキリスト教徒が存在するようになったことはいくつかの史料から窺える。例えば、ヨハネス・クリュソストモスは386年末あるいは387年初に行った説教⁹²で「ヤコブは首を切られ、ヨハネは何度も殺された *καὶ γὰρ Ἰάκωβος ἀπετμήθη μαχαίρᾳ, καὶ Ἰωάννης πολλάκις ἀπέθανε.*」という奇妙な表現をしている。おそらく彼はヨハネが煮え滾った油の大釜に投げられたという伝承や、追放されたという伝承を「何度も殉教し」等の言葉で表現する⁹³。何らかのテキストに基づき、これを引用したのだろう。だが、彼は古い意味での「殉教」の用語法を知らなかったようで、この引用に対する違和感が拭えなかったためか、何年か後にはマタイ 20.20 における一節を引いた説教の中でシンプルに「暴力的死 *βιαιῶ θανάτῳ* で命を失う」と言い換えている⁹⁴。

また4世紀の後半、ニュッサのグレゴリオスはステファノ、ペトロ、ヤコブ、

⁸⁸ 上記エウセビオス『詩篇注解』; Weidmann (1999), 133.

⁸⁹ Polycarp *Ep* 9.1.

⁹⁰ K. H. Rengstorf (1969), 41; W. Schmithalts (1969), 47: 「これは使徒が被らねばならない使徒職の本質である」。

⁹¹ W. Bauer (1965), 52.

⁹² Joannes Chrysostomus *De petitione matris filiorum Zebedaei* (= *Contra Anomoeos, homilia 8*), PG 48. 775. 21-22.

⁹³ cf. Eusebius *HE* 5.2.2: *πολλάκις μαρτυρήσας.*

⁹⁴ Joannes Chrysostomus *De Lazaro (homiliae 1-7)*, PG 48. 983.7

ヨハネについて、彼らは異なる種類の殉教を耐えたのだと述べる (*διαφόροι δὲ τοῦ μαρτυρίου τρόποις ἐναθλήσαντες*)。それによれば、ペトロは十字架にかけられ、ヤコブは首を切られた、と言及した後、使徒ヨハネに関してはこう述べる。

「祝福されしヨハネは多くの、様々な闘いを耐え、この信仰をはぐくむことに関して様々な立場で成功した。彼は『溺れさせようという不成功に終わった企てを被り』そして殉教者のコロスに数えいれられた⁹⁵。ヨハネは彼の受難ではなく、彼の死によって不朽の記念が教会を飾ることになる死の類いの殉教を被ることへの欲求によって尊敬されている。」⁹⁶

Boismard は、「グレゴリオスはヨハネが殺されたと考え、この死がヨハネに『殉教者』の称号を与えることのできる類いのものだと証明したかったのである」と認めている⁹⁷。「ヨハネは受難ではなく殉教への欲求によって尊敬されている」という一節は、グレゴリオスの周辺に知られていた伝承には、ヨハネが殉教者であることと、ヨハネが受難死をしてはいないことが並行して記憶されていたことを窺わせる。ここでグレゴリオスが見せたような、使徒ヨハネが殉教死していないことに対する説明をしようとする努力は、時代が進むに連れてさらに多様化していく。

大英図書館に所有されているコプト語文学断片のハリス・コレクションには、コプト語のサヒディ方言で書かれた、スミュルナ司教ポリュカルポスに関するテキストを含む4枚のパピルス葉が存在する⁹⁸。これらの断片は Or. 7561, nos. 55, 56, 63, 64 としてカタログに載っている。Weidmann はこの中に、使徒ヨハネが殉教死していないために、彼の弟子ポリュカルポスが代わりに殉教死することが運命付けられたという説明をしている伝承を発見している。Weidmann による英訳から紹介する⁹⁹。

⁹⁵ 「溺れさせようという不成功に終わった企てを被り *κενὸν μὲν εἰς ὕδωρ τοῦτο πέρας ... κεκριμένος*」の部分は写本上判読しにくくなっている (PG 46. 732, n. 17-18)。Boismard (1996), 48-50 は使徒ヨハネが死亡したことがオリジナルテキストに書かれていたと推測している。

⁹⁶ PG 46. 729. 50-732. 6 (Gregorius Nyssenus Encomium in sanctum Stephanum protomartyrem ii)。

⁹⁷ Boismard (1996), 49-50。

⁹⁸ この断片に関しては Weidmann (1999), 8-11. 成立年代に関しては 146-147 で論じられている。オリジナルのギリシア語テキスト成立とコプト語への翻訳のどちらも 3-6 世紀と推定されている。

⁹⁹ Weidmann (1999), 47, (e)=55v。

「恐らく2枚かそれ以上のページが(d)の後欠落」
 [・・・]彼らは推定し[た], 名前[・・・][・・・]彼を,
 兄弟たち, |荒野へ.
 彼[に]関してはどうかという|と, 彼は彼らに尋ねた||, 『何故
 あなた方は|私とともに場所から場所へと動き回るのですか?』|
 そして彼らは彼に伝えることを恐れた|彼が彼らを許さず
 |そして独り法||廷に行くことを. それゆえ彼らは
 頼んだ|彼に 何回も|: 『これは必要なことなのです
 私が|法廷 [機関] によって死ぬこと, 主の使徒が||
 私に教えた方法によって|彼が私に言ったとき, 「何故なら
 かの主||は私に私が|寝台の上で死ぬことをお許しになった,
 貴方には|法||廷によって死ぬことが必要だ.」
 均衡が[・・・]ように|.』
 [2かそれ以上の行が欠落]
 [・・・][ポリュ]

ここではポリュカルポスが、彼の殉教死を防ごうとするスミュルナのキリスト教徒たちにこう説明する。師であるヨハネはベッドで死ぬことを許され、代わりに弟子であるポリュカルポスは法廷で死なねばならない。これはヨハネの教えなのである、と。ここには、ヨハネが殉教“死”していないという伝承と、使徒は殉教“死”しなければならないという思想を両立させようとする思考があらわれている。

5世紀の北アフリカでは、使徒ヨハネの「殉教」伝承は全く忘れ去られていたようである。アウグスティヌス周辺の信徒たちはヨハネ自然死伝承を受け入れ、この伝承が使徒は殉教“死”したはずであるという思想と矛盾していると考え問題視していたようだ。アウグスティヌスは、使徒ヨハネの墓で下から次々と出てくる土についての噂が広まっていること、そしてその噂は使徒ヨハネが「殉教によって称賛されていないゆえ、死の価値を称賛するため」という理由で生み出されたことに困惑している。

「もし … 聖ヨハネが … 命ないものとしてその墓の中に横たわっているとすれば、残るところ、下から次々と出てくる土について噂となって広まっていることが、実際起こってくるとしても、彼の死は殉教とは讃えられていないので（というのは迫害者がキリストへの信仰のために彼を殺したのではないから）そのようにして彼の貴重な死が示されるために起こったのか …」¹⁰⁰

こうして使徒ヨハネの殉教にまつわる伝承には「殉教した」という情報と「自然死した」という情報が混在し、中世に至るまで発展を続けた。中世における

¹⁰⁰ Augustin *Tractate* 124.3. 邦訳は茂泉昭男他（1993）、432に拠った。

古典文学『黄金伝説』には、以下のような一節が現れる。

「聖ステファノの殉教は意志と行為とを伴った殉教であり、聖ヨハネが示しているのは、意志をそなえてはいるが行為を伴わない殉教であり、罪なき聖嬰児らのそれは、行為をと伴っているが意志をもたぬ殉教なのである」¹⁰¹。

本章で見たように、使徒ヨハネの最期に関する諸伝承は、「殉教」という用語法の変遷と、古い用語法ならびに用語が変化したという歴史自体が忘れ去られたことにより、互いに矛盾する伝承群であるかのようにみなされ、さらに使徒職と殉教（死）を分かちがたく結びつけた思想が、その伝承をさらに混乱させてきたことが明らかとなった。ここまでの議論で、本稿はこうした伝承群全体を整合的に理解できる解釈を提示し、上述した用語法の変遷を辿る一つのモデルケースを示すことで、殉教神学の発展過程、用語法変遷の背後にあった帝国と教会の関係史の一端を明らかにすることに寄与するという目的を果たしたと考える。

ただし、この他にも、中世を通じ、使徒ヨハネの最期について、お伽噺のような伝承が様々に編まれたが¹⁰²、それらに関して論じることは、もちろん本稿の範囲を超えている。

付記：本稿は平成 22 年度東北大学大学院 G P 院生プロジェクト歴史資源個別分析プロジェクトによる研究成果の一部である。

¹⁰¹ W. G. Ryan (1993), 1. 50. 訳者 Ryan, xiv によれば、「『黄金伝説』は基本的に同時代人の著作である。」；cf. Weidmann (1999), 137, n. 44, 45.

¹⁰² 本稿では取り扱わなかったこれらの伝承については、Kaestli (1983), 326-36；また M. Jugie (1944).

【文献】

- Aune, D. E. *Religion in Geschichte und Gegenwart* IV 4 Auflage, Tübingen, Mohr Siebeck, 2001.
- Badham, F. P. The Martyrdom of St. John: critical and historical notes, *The American Journal of Theology*, vol. 3, no. 4 (1899), 729-740.
- The Martyrdom of John the Apostle, *The American Journal of Theology*, vol.8, no.3, (1904), 539-554.
- Bardy, G. Aux origines de l'école d' Alexandrie, *RSR* 27 (1937), 65-90.
- Barrett, C.K. *The Gospel according to St. John: An Introduction with Commentary and Notes on the Greek Text*, 2nd ed.; Philadelphia: Westminster Press, 1978.
- Bauer, W. "Accounts of the Apostles in Early Christian Tradition", E. Hennecke and W. Schneemelcher (eds), R. McL. Wilson (trans), *New Testament Apocrypha*. vol.2, *Writings Relating to the Apostles, Apocalypses, and Related Subjects*, Philadelphia: Westminster Press, 1965.
- Baynes, N. H. The Great Persecution", *CAH*¹, 12.646-77.
- Beasley-Murray, G.R. *John*, World Biblical Commentaries, no.36. Waco, Tex.: World Books, 1987.
- Bernard, J. H. The traditions as to the Death of John the Son of Zebedee, *Irish Church Quarterly*, 1 (1908), 51-66.
- John the Apostle did not suffer Death by Martyrdom, A. H. McNeile (ed.), *A Critical and Exegetical Commentary of the Gospel according to St. John*, vol. 1, Edinburgh, T.&T. Clark, 1928, xxxvii-xlv.
- Boismard, M.-É. *Le Martyre de Jean l'Apôtre*, Cahiers de la Revue Biblique 35, Paris 1996.
- de Boor, C. Neue Fragmente des Papias, Hegesippus und Pierius in bisher unbekanntem Excerpten aus der Kirchengeschichte des Philippus Sidetes, *Texte und Untersuchungen*, Bd. 2, (Leipzig: J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung), (1888), 165-84.
- Botte, B. *La Tradition Apostolique de Saint Hippolyte. Essai de reconstruction* (Liturgiewissenschaftliche Quellen und Forschungen, Heft 39), Münster, 1972⁴.
- Brakke, D. Self-differentiation among Christian groups: the Gnostics and their opponents, M. M. Mitchell (ed.), *Cambridge History of Christianity: vol. 1, Origin to Constantine*, 2006, 245-60.
- Brown, R. E. John, Apostle, St., in J. P. Whalen (eds.), *New Catholic Encyclopedia*, The Catholic University of America, Washington, D. C. 1967, 1005-1006.
- Brown, R.E. John, Apostle, St., in Berard L. Marthaler (eds.), *New Catholic Encyclopedia, Second Edition*, The Catholic University of America, published by Gale Group, Inc., 2003, 895-897.
- Burkitt, F. C. *Gospel History and Transmission*, Edinburgh, 1907².
- Bultmann, R. *The Gospel of John: A Commentary* (trans. and ed. by G. R. Beasley-Murray; Philadelphia: Westminster Press,) 1971.

- Charles, R. H. *A Critical and Exegetical Commentary on the Revelation of St. John*, 2 vol. ICC; New York; Charles Scribners Sons, 1920.
- Corssen, P. *Die Vita Polycarpi*, *ZNW* 5 (1904), 266-302.
- Culpepper, R. A. *John, the Son of Zebedee: The Life of a legend*. Studies on Personalities of the New Testament. Columbia; University of South Carolina Press, 1994.
- Cureton, W. (tr.) *Eusebius of Caesarea: The History of the Martyrs in Palestine*, Williams and Norgate, London, 1861.
- Dawson, D. *Allegorical readers and cultural revision in ancient Alexandria*, Berkeley, University of California Press, 1992.
- Delehaye, H. *Sanctus. Essai sur le culte de saints dans l'antiquité*, Bruxelles 1927.
- Ewald, H. *Die Alterthümer des Volkes Israel*, (Geschichte des Volkes Israel, Bd. 8), 1866 (= *The post-Apostolic age*/ J. F. Smith trans. (The history of Israel, v. 8), 1886).
- *Geschichte der Ausgänge des Volkes Israel und des nachapostolischen Zeitalters* (Geschichte des Volkes Israel, Bd. 7), 1868 (= *The Apostolic Age* / J. F. Smith trans. (The history of Israel, v. 7), 1885).
- Feltoe, C.L. *St John and St James in Western 'Non-Roman' Calendars*, *The Journal of Theological Studies*, 40 (1909) 589-92.
- Hall, S. G. *Ecclesiology forged in the wake of persecution*, M. M. Mitchell (ed.), *Cambridge History of Christianity: vol. 1, Origin to Constantine* (2006), 470-484.
- Hengel, M.,
/Bowden, J. (tr.) *The Johannine Question*, London: SCM Press, 1989.
- Horn, F. W. *Johannes auf Patmos, Studien zur Johannesoffenbarung und ihrer Auslegung* (FS. O. Böcher), Neukirchen 2005, 139-59.
- Jugie, M. *La mort et l'assomption de la Saint Vierge: Etude historico-doctrinale* (Studi e Testi, 114; Vatican City: Biblioteca Apostolica Vaticana, 1944), Excursus D: "La mort et l'assomption de Saint Jean l'Évangéliste."
- Kaestli, J.-D. *Le rôle des textes bibliques dans la genèse et le développement des légends apocryphes: le cas du sort final de l'apôtre Jean*, *Augustinianum* 23 (1983), 319-36.
- Koester, H. (ed.) *Ephesos: Metropolis of Asia: An Interdisciplinary Approach to Its Archaeology, Religion, and Culture*, 1995.
- Krüger, G. *Zur Frage nach der Entstehung des Maertyrertitels*, *ZNW* 17 (1916) 246-49.
- Lagrange, M.-J. *L'Évangile selon saint Jean* (Études Bibliques), Paris 1925.
- Latimer-Jackson, H. *Excursus I: The Death of John Son of Zebedee*, *Problem of the Fourth Gospel*, Cambridge University Press, 1918, 142-150.
- Lietzmann, H. *Die drei ältesten Martyrologien*, Bonn 1911².
- Lipsius, R. A.
/Bonnet, M. (eds.) *Acta Apostolorum Apocrypha*, 1891-1903, (Nachdruck) Darmstadt 1959.
- McNeile, A. H. *An Introduction to the Study of the New Testament*, C.S.C. Williams (rev.): Oxford: Clarendon Press, 1953.
- Mommsen, Th. *Römisches Strafrecht*, Leipzig 1899.

- Rengstorf, K.H. *Apostolate and Ministry: The New Testament Doctrine of the Office of the Ministry*, P. D. Pahl (trans), St. Lois: Concordia Publishing House, 1969.
- Ryan, W. G., (tr.) Jacobus de Voragine, *The Golden Legend: Readings on the Saints*, Princeton: Princeton University Press, 1993.
- Sage, M. *Cyprian*, (Patristic monograph series no.1) Cambridge, Mass, Philadelphia Patristic Foundation, 1975.
- Schaff, Ph. (ed.) *NPNF-213. Gregory the Great (II), Ephraim Syrus, Aphrahat*, Oxford: New York, 1898, (=Grand Rapids, MI: Christian Classics Ethereal Library, 2004).
- Schenke, H.-T. *The Function and Background of the Beloved Disciple in the Gospel of John, Nag Hammadi, Gnosticism, and Early Christianity* (eds. Charles W. Hedrick and Robert Hodgson; Peabody, Mass.: Hendrickson, 1986)
- Schmithalts, W. *The Office of the Apostle in the Early Church* J. E. Steely (trans), Nashville: Abingdon Press, 1969.
- Schoedel, W. R. *Polycarp, Martyrdom of Polycarp, Fragments of Papias* vol. 5, R. M. Grant (ed.), *The Apostolic Fathers: A New Translation and Commentary*, Camden, N. J.: Thomas Nelson and Sons, 1967.
- Schwartz, E. Über den Tod der Söhne Zebedaei. Ein Beitrag zur Geschichte des Johannesevangeliums, *Abhandlungen d. Göttinger Gesellschaft der Wss.*, N. F. 5, 1904, (= *Gesammelte Schriften* 5, Berlin, 1963, 48-123).
- *De Pionio et Polycarpo*. Göttingen: Officina Academica Dietrichiana, 1905
- Spitta, Fr. Die neutestamentliche Grundlage der Ansicht von E. Schwartz über den Tod der Söhne Zebedäi, *ZNW* 11 (1910) 39-58.
- Stählin, O. (ed.) Clemens Alexandrinus *Stromata Buch I-IV*, neu hrsg. von Ludwig Fruchtel 4. Aufl. mit Nachträgen von Ursula Treu, Berlin: Akademie-Verlag, 1985.
- Streeter, B. H. *The Primitive Church: Studies with Special Reference to the Origins of the Christian Ministry*. New York: MacMillan, 1929.
- Weidmann, F.W. *Polycarp & John: The Harris Fragments and Their Challenge to the Literary Traditions*, University of Notre Dame Press, Notre Dame, Indiana, 1999.
- Wellhausen, J. *Das Evangelium Marci: Übersetzt und erklärt*, Berlin, 1903, 90.
- Wright, W. *Journal of Sacred Literature*, 1866, 45 sqq.
- Zahn, Th. *Einleitung in das Neue Testament*, Bd. 2, Leipzig, 1899.
- *Apostel und Apostelschüler in der Provinz Asien*. vol. 6, *Forschungen zur Geschichte des neutestamentlichen Kanons und der altkirchlichen Literatur*. Leipzig: Andreas Deichert, 1900.

- 秋山学 アレクサンドリアのクレメンス 「救われる富者は誰か」 『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』 上智大学中世思想研究所編 平凡社 1995年.
- 荒井献・川島貞夫他著 『総説 新約聖書』 日本基督教団出版局 1981年.
- 荒井献・八木誠一他訳 『新約聖書外典』 講談社文芸文庫 1997年.
- 荒井献・佐竹明他訳 『使徒教父文書』 講談社文芸文庫 1998年.
- 佐竹明 『ヨハネの黙示録 上巻』 新教出版社 2007年.
- 茂泉昭男・岡野昌雄訳 『アウグスティヌス著作集』 25巻 教文館 1993年.
- 清水宏 「ヨハネ」 『新カトリック大辞典』 第4巻 上智学院 新カトリック大辞典編纂委員会 研究社 2009年, 1168-1169.
- 豊田浩志 「殉教者」 『新カトリック大辞典』 第3巻 上智学院 新カトリック大辞典編纂委員会 研究社 2002年, 260.
- 秦剛平 『エウセビオス 教会史』 山本書店 1988年.
- 保坂高殿 『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』 教文館 2003年.
- 『ローマ史のなかのクリスマス 異教世界とキリスト教1』 教文館 2005年.
- 『ローマ帝政中期の国家と教会—キリスト教迫害史研究193-311年』 教文館 2008年.
- 松田伊作訳 『旧約聖書XI 詩篇』 岩波書店 1998年.

(東北大学)